

キリスト教主義女子大学学生の 宗教意識についての実証的研究

(その二)

溝	口	靖	夫
雀	部	猛	利
難	波	紋	吉

〔新入生の宗教意識〕

前号に宮城女子学院大学、広島女学院大学、東京女子大学及び神戸女学院大学の四校の昭和36年度における新入生の宗教意識の調査資料を報告したので、本号ではこれに若干の解釈を試みたい。ただしこれは新入生に限られているのであり、二年、三年、四年生については、次号に集計の結果を報告し、それによって、入学後の宗教意識の動向も合せて考察する見込みである。

〔宗教意識の背景〕

先ず彼等の家庭的背景について瞥見すれば、四大学全体として7.4%の家庭がキリスト教を家庭の宗教としている。これはキリスト教主義女子大学が、単に一般社会の縮図として社会をそのまま反映しているのではなく、その新入生の集団がすでに、かなりキリスト教的色彩の濃い社会的背景をもって成立していることを示すのである。今日の日本におけるキリスト教徒の全国民に対する割合は大体0.78%に過ぎないのであるから、この7.4%^{註1}というのはかなり高率である。しかしこれを歴史的に見ると、過去の或る時代に較べて、必ずしも高いものとはいえない。いまこれを神戸女学院について見れば、学院全体として、初期においては、少数のものがキリスト教の家庭から送られて来た。当時は日本の社会にまだクリスチャンの数が少なかったから自然のことである。す

なわち、当時では神戸女学院という社会が日本の全社会におけるキリスト教の前衛としての存在意義をもっていたといえる。このことは或る意味では現在でも妥当するのであるが、その後、キリスト教が国民の間に徐々に普及するにつれ、キリスト教主義の学校は、一方的に学校から社会へキリスト教精神をもって働きかけるのではなく、反対に社会からもキリスト教精神をもって学校へ働きかけられるという相互作用が現われたのである。すなわち、かなり多くのキリスト教を信奉する家庭から子女が送られて来るようになった。神戸女学院において 1904 年には全学院の生徒の約10%が、家庭に少なくとも一人のクリスチャンをもつ家から来ている。1912年には約半数が、1919年には約 $\frac{1}{3}$ がクリスチャン・ホームから来ている。^{註2}このことは神戸女学院の学生の全体的な雰囲気形成に大きな作用をもつものであった。しかるに、現在ではふたたび、入学者の家庭の中キリスト教的なものが少なくなって来たことは、学生の雰囲気形成上、大きな変化をもたらしたと云える。この家庭的背景におけるキリスト教的なものの数の減少ということの原因は、いろいろ考えられるが、その一つとして、学生数の増加が考えられる。1919年に全学院在籍数 462 であったものが、この調査の行なわれた 1961 年夏前には、大学 997、中高部 826 で、計 1,823 人になっている。人数がふえれば、より多方面からの家庭から子女が来るようになるのは自然の趨勢である。また入学志願者の選考方法もこの比率に影響している。今日では志願者の数も多くなり、従って、キリスト教教育に共鳴するからといって、何らの考慮も払われないのであるから、一般社会におけるキリスト教徒の人口の比率の増大という原因以外には、特にキリスト教的家庭からの入学者の比率が増加するという見透しはないわけである。

次に、新入生の高校時代の背景について見れば、四校の中、宮城、広島、神戸は、同学院内に高校があるので、下から上って来たものが相当あり、従って、キリスト教系私学の高校出身者が多いわけであるが、東京は附属高校がないためか、公立系からのものが非常に多い。また高校時代の背景がキリスト教意識の形成に重要な関係をもつことが分った。すなわち、四大学の新入生の中からキリスト教信者を調べたところ、その殆んど大部分がキリスト教主義の高

校から来たものであった。

〔入学前後の宗教的関心〕

ところで、このような家庭的背景並びに高校時代の背景をもつ新入生が、彼等自身いかなる動機で志望したかは、彼らの宗教意識との関連において大切な要素をなすものである。その調査の結果、四校全体として、「高い教養を目指す教育が行なわれているから」というのが 18.9% で一番多く、次が「ただなんとなく、入学し易いから」が 17.2% である。これは、宮城、広島、神戸三校に高校が併設されており、下から連続的に上って来るのが一番自然的コースで問題がないと感じられたのであろう。その次が「学校の環境や設備が気に入ったから」の 14.7%、「アカデミック・スタンダードが高いから」が 13.6% 「世間で評判がかなり良いから」が 12.2% で、「キリスト教的雰囲気ひかれて」は第七位の 10.9% である。尤も宮城と広島ではこの宗教的理由が、前者の 26.2%、後者の 21.9% となっており、相当高く、これに反して、東京の場合は、宗教的理由は併設高校のないため僅か 3.9% で、その反面「アカデミック・スタンダード」が 30.5%、「高い教養」が 29.9% となっている。

キリスト教主義の大学に入学している学生でありながら、入学以前に自分の志望校がキリスト教主義の学校であることを知らずに志望している者がいた。東京女子大学の新入生のうちの 5.9% の者がキリスト教主義大学であることを知らずに入学している。また入学以前からキリスト教に関する予備知識をもっていたか否かを調べてみたところ、東京女子大学の新入生の 50.8%、神戸女学院大学の新入生の 33%、宮城学院の新入生の 40.5% がキリスト教に関する予備知識を持たない新入生であった。ただ広島女学院の新入生の場合にはその 96.3% の者がキリスト教について予備知識をもっていたが、それはキリスト教主義学校から進学してきたものが 83.3% もいるからである。教会学校でキリスト教に関する知識を得た学生は神戸女学院大学の新入生の 31.9%、東京女子大学の新入生の 21.4%、宮城や広島の場合においても新入生の 16.75% と 16.65% の者が教会学校でキリスト教についての予備知識をもつようになった学生である。

一般に高校の教師は大学の入学難易や学科別の特色などについて進学の指導を充分行なっているようであるが、その大学が設立された立学の精神や宗教的または思想的立場などについては充分な進学指導がなされていないようである。

新入生が若しも他の大学を選択するとしたら、どのような系統の大学を志望するかを尋ねてみたところ、彼女たちは官公立の男女共学を志望するものが多く、宮城学院では 36.2 %、広島女学院では 27.4 %、東京女子大学では 47.9 %、神戸女学院では 37.2% の新入生が共学の官公立大学を志望している。またキリスト教主義でない私立大学を希望するものは四つの女子大学とも新入生の約 15% 位いる。しかし現在在学しているキリスト教主義大学で受けているキリスト教主義教育に対し反対の態度を抱いている新入生の割合は、東京女子大学では 4.5%、広島女学院では 7.4%、宮城学院では 9.5%、神戸女学院では 15.1% 程度であることが解った。

新入生がキリスト教を求める態度について調べてみると、聖書を殆んど読まない学生は宮城学院では新入生の 28.6%、広島女学院では 38.9%、東京女子大学では 44.2%、神戸女学院では 42.6% の新入生がキリスト教主義大学に学んでいても自発的に聖書を殆んど開かない学生である。ところが宮城学院や神戸女学院の場合には、殆んどの学生が学校内でもたれる毎日の礼拝に少なくとも週三回以上出席しており、学校礼拝が毎日ではない広島女学院や東京女子大学の場合は学校内の礼拝出席率も低くなっている。殊に東京女子大学では学内礼拝に殆んど出席しない新入生は 57.8% に及んでいるし、広島女学院の場合でも週一回しか出席しない新入生は 70.4% に及び、殆んど出席したことがない新入生が 7.4% に達している。また日曜日の教会出席という立場から宗教的な態度を調べてみると、神戸女学院の新入生は 66.4% まで教会に出席しており、広島女学院の 42.5% の新入生が教会に通っている。ところが宮城学院と東京女子大学の新入生は、前者の 16.7% と、後者の 14.7% となっているが、これは、宮城の場合、この調査の数字に現われたかぎり公立高校出身者とキリスト教系私立高校出身者との比が約 2:1 となっており、東京もキリ

スト教系私立高校出身のものが少数であるので、新入生にまだ教会出席の習慣が少いたためであろう。これと対蹠的に、広島と神戸では、新入生の中キリスト教系私学出のものが多く、教会出席者の比率の比較的高い有力な理由であろう。

このことは学生の人生観の上にも反映し、「人生は神の支配や神の摂理によって導かれるものである」というキリスト教的な人生観を懐いている学生は神戸女学院大学では 21.3%、東京女子大学では 11.1%、広島女学院では 16.7% 宮城学院では 9.5% に過ぎない。しかし「人生は個人の能力と努力によって殆んど決定される」という青年特有の自負心を有する学生はどの大学においても新入生の約 3 分の 1 位にも及んでいることは注目すべき事実であった。しかし入学以前における彼女たちの人生観と大学に進学してからの人生観とを比較してみると、キリスト教的な人生観の比率がより高くなっている。入学前から「人生は神の摂理によって導かれる」と信じていた学生は、宮城学院では僅かに 2.4%、広島女学院では 5.6%、東京女子大学では 6.5%、神戸女学院の学生の場合にも 16.3% に過ぎなかったのが、入学後にはいずれも約 6% ほど増加している。また逆に「人生は個人の能力と努力による」と考えていた学生の比率も入学後は減少している。東京女子大学と神戸女学院の学生のなかには「宗教では人間を救済することができない」と信じているものが新入生の 5% を占め、宮城学院や広島女学院の学生に較べるとその比率が高いが、「キリスト教のみが真の救いの宗教である」と信じている学生の比率も宮城学院や広島女学院の学生よりもその比率が高く、神戸女学院の新入生の 10.1%、東京女子大学の新入生の 9.1% が「キリスト教のみが唯一の救済宗教である」と答えている。キリスト教主義大学に入学する以前に較べると、「宗教では人間を救済し得ない」と考えていた学生数も大学に入学してかな若干ながら減少している。

昔はキリスト教主義女子大学に学ぶ学生は、その殆んどの者がピューリタンの生活様式をとり入れていたが、今日ではピューリタンの生活様式に賛成する学生が極めて少なくなってきた。またキリスト教主義学校へ自分の子供を進学

させたいかどうかについて尋ねてみると、女の子の場合にはキリスト教主義学校へ入りたいと答えた比率が高いのに、男の子ならばキリスト教主義学校へ入れたくないと考えている割合が多い。これは男の子に対する宗教教育よりもむしろ知的教育への依存度の高さを反映させている。また結婚の相手を選択する場合キリスト教信者であることが望ましいと考えている者は1割にも満たない。

〔宗教意識の家庭的環境との関連性〕

両親が学校のキリスト教教育に対してどう考えているかを学生に尋ねてみたところ、父親より母親のほうがキリスト教教育に賛成している比率が高い。宮城学院の新入生の場合では父親は 41.5% が賛成しているのに母親は 64.3% もキリスト教教育に賛成している。広島女学院では 41.1% の父親がキリスト教教育に賛成だが、母親は 66.7% も賛成している。また東京女子大学では 31.3% の父親がキリスト教教育に賛成しているが、母親は 51.3% も賛成している。神戸女学院の新入生の父親の場合には 46.5% がキリスト教教育に賛成しているが、母親は 71.1% も賛成している。キリスト教主義大学では学生に教会出席を奨励しているが、両親は学校が教会出席を奨励することに対してどう思っているかを学生に尋ねてみたところ、父親より母親のほうが結構なことだと喜んでいる率が高い。宮城学院では父親の 20.5% が教会出席の奨励を喜んでいるが、母親は 35.6% が教会出席を喜んでいる。広島女学院では父親の 16.6%、母親の 31.2% が教会出席の奨励を喜んでいる。東京女子大学では父親の 12.5%、母親の 22.1% が教会出席の奨励を喜んでいる。また神戸女学院の場合には教会出席の奨励を喜んでいる父親は新入生の 31.9%、母親の 47.1% で、いずれの場合にも教会出席の奨励を喜んでいる両親は、父親の比率より母親の比率の方が高い。

次に宗教意識に対する両親の態度がもつ制約性について見れば、報告 R22 受洗に対する両親の態度（受洗者の場合）に明かなように、四大学通計において受洗者の 48.3% が父の賛成と、66.8% が母の賛成の場合となっている。しかも、これら受洗者の決意をもたらすために影響を与えた人（R17）について

見ると、家庭の影響は他の要素に比して必ずしも高いものでなく、21.7%を示すにすぎない。教会の牧師、伝道師による勧めが第一位で 51.1% となっている。このように見ると、受洗者の最後の決心に積極的に作用を与えたのは両親が最高ではないが、少くとも、受洗の決心が可能になった環境的条件の最も重要なものに、両親の賛成ということがあったことは明かである。すなわち、両親の態度は宗教意識の重要な飛躍点において先ず第一に肯定的な促進的な方向における制約性を有することを示している。

次に両親の態度の宗教意識に対する制約性の第二の種類について見れば、四大学を通じて、その新入生の両親において無関心又は無干渉が一番多い。すなわち 学校における宗教教育に対しては、父の 48.1% が無関心、母の 30.6% が無関心である。学校の教会への出席奨励については、父の 53.8%、母の 44.3% が無関心である。更に、未信者の洗礼問題についての態度としては、父の 45.7%、母の 44.3% が無干渉を示している。これらの無関心又は無干渉の態度は、新入生の僅か 10.9% が学校の立学の精神又は宗教的立場を入学の動機としていることと対応するものであり、親も子も、ともに宗教上のことには無関心のものが多いことを物語っている。

制約性の第三の種類としては、否定的又は禁止的なものが示されている。すなわち、両親は問題がいよいよ子女の洗礼のことになると無干渉とばかりいっておれなくなり、反対の態度をとるものがふえて来る。ただ学校が宗教教育をするというだけなれば、もともと承知のことでもあり、これに対して「余り喜んでいない」、「反対している」がそれぞれ父の場合 1.6%、0.2% で、母の場合「余り喜んでいない」が 3% で「反対」は見られない。教会出席の奨励に対しては、父の場合「余り喜んでいない」が 4.6%、母の場合 6% で、「反対している」は母の 0.7% にすぎない。ところが、洗礼の問題になると、父の 35%、母の 32.4% が反対となっているのは注目すべきことである。殊に実際に洗礼を受けたものについて見れば、父の 11.1%、母の 22.2% が反対をしている。この際、父母または父母の中のどちらかの反対にもかかわらず、これを押しきって受洗したものの数は全体で 6 名であり、反対のために受洗を止めた

もの数も6名であり、その割合は両者等しいのである。しかも、これは明かに反対に会ってやめたと書かれている場合であるが、求道者及びF3の8「関心はあるが信じている宗教なし」の中には、両親の受洗反対のため、進んでキリスト教信者に進まないものも存することであろう。神戸女学院の新入生の場合、F3の8の関心をもつもののグループの中、受洗問題に関して、父母とも反対が33%、父又は母の反対のものが8.6%、父母とも無干渉が37%となっている。又、同大学新入生の求道者については、父母又は父母の中一人が反対のものが求道者の約1/6であった。東京女子大においては、新入生のF3の8の関心者のグループ中、父母とも受洗問題で反対者23%、父又は母の一人が反対のものが6.7%、父母とも無干渉51%となっている。宮城では同じくF3の8のグループで、父母とも反対が19%、父又は母の一人が反対4%となっており、広島では、父母とも反対33%、父又は母の一人が反対14%となっている。これらの反対に対する学生側のレスポンスについては、R19、及R21の両親の態度や考えに対してどう思うかという問いに対する答えから見て、子女は大体あまり強い反撥を感じていない様である。R19のキリスト教主義教育に対する両親の態度についての学生の気持は、四大学を一緒に見て、父に対して49.5%が肯定的で、わずかに2.5%が否定的、母に対して、54.8%が肯定、3%が否定となっている。R21の学校側の教会出席奨励に対する両親の態度についての四大学の新入生の考えの通計では、父に対して43.9%が肯定、3%が否定、母に対して48.3%が肯定、4%が否定的となっている。これから察するならば、学生の信仰形成に対する両親の態度の制約性は、その否定的面において、あらわな姿においては出ていないが、相当隠然たる作用力をもつのではないかと考えられる。

家庭の環境における伝統性について考察するため、家の仏壇や神棚について調査した。その結果、四大学の新入生の家庭で、通計、仏壇のあるものが64.2%、無いものが35.2%、神棚のあるものが40.7%、ないものが58.7%であり、仏壇の方が家の中で神棚よりも存在の率が高い。しかし、学校で基督教の教育又は儀式を学ぶ学生の家庭における宗教的雰囲気又は行事がこの様な

状況であることは、いわゆるキリスト教国たとえばアメリカの社会における学生の宗教意識と較べて、比較にならないほどの複雑さをもつものであることが分る。アメリカでも学生の宗教意識の中で、両親又は家庭の伝統的信仰との間のギャップは相当大きく、オルポートによるハーバード（414名）と女子大であるラドクリフ（86名）の学生についての調査によれば、「正統的キリスト教々義^{註4}の歴史的な型が信じられる範囲を概算すると、25%という数に近い。」とされ、75%は大かれ少なかれ、従前の信仰の型との間にギャップを感じているのである。しかし、その場合にも、その隔りは、キリスト教内の信仰簡条であるとか、教会観であるとかの様な同質的なものの間におけるものであり、唯物的な異質的なものに対しては大多数が一致を見る。たとえば、マルキシズムの「宗教は人民の阿片である」という立場に対しては賛成12%、意見を述べないもの12%で、72%がこれに鋭く反対する^{註5}、と報ぜられている。日本の社会、日本の家庭を背景とするキリスト教主義学校の学生達が日々直面している宗教経験の種々相、複雑さは想像以上であることが明かである。それらの間の開きは同質間のものでなく、異質間のものである。それに対して、どう社会・文化的適合（sociocultural accommodation）をなしているかを調べたのが、R23以下の仏壇と神棚に関する項目である。そこで見られることは、四大学の新入生の通計で、仏壇を毎日拝むものは、家に仏壇のあるものの僅かに1.4%であり、ときどき拝むものが34%、拝まないものが70%であった。又、神棚については、家に神棚のあるものの中、僅かに0.6%が毎日拝み、22%がときどき拝むにすぎない。これで見ると、学校と家庭の宗教との間には相当ひらきがあるにも拘らず、本人は案外自由な気持でそれに適合していることが分る。拝まないものについても、R25に見えるように、家族との間にどんな人間関係が起るかとの問いに対して、批判されたり、気まずい感情が流れると回答したものは極く僅かで、多数は無干渉、無関心であることがわかった。又、本人が仏壇、神棚を拝む場合も、四大学の新入生通計で、信仰的な立場からのものは僅かに0.5%、祖先の霊や神に敬意を表しているものが15.5%、感謝と祈願をこめてというのが20.3%、家族との調和を保つために5.3

%、慣習的に行なっているものが 24.9% となっており、比較的気楽な気持でそれらに対応していることがわかる。こうした宗教的な相互の適合性は、多数の宗教が混在している日本社会の人間関係における伝統的知恵ともいえるべきもので、それがただちに厳密な意味での信仰のシンクレティズムであるとは云えないが、日本人の宗教意識又は宗教的行為の一つの顕著な様相として認められるものである。いま見たのは、若い学生達と家庭の従前の宗教的雰囲気又は行事との間の対照であったが、家庭内において、祖父母のゼネレーションと父母のゼネレーションとの間のひらきのあることも、回答によって知ることができた。時代的に家庭内の宗教的雰囲気や伝統は変わりつつあることがわかる。

〔地域社会との関連性〕

家庭的環境とともに、地域社会との関連性も問題になるのであり、そのことの手懸りとして家の付近の神社仏閣への参拝行為が調査の対象とされた。これも、四大学の新入生の通計では、お宮やお寺にお参りしないというのが一番多く（無回答は別として）、神社に参拝しないものは 33.5%、寺院に参拝しないものは 34.7% である。参拝するものについてその気持を見ると、神社、寺院とも、慣習としてというのが一番多く、神社の場合 28%、寺院の場合 15.5% がそれに該当し、その他は敬意を表するため、家族や近所のつきあい、家族のものからいわれるので等が 5% 乃至 2% の率で見られ、純粹に信仰の上で参拝するというのは神社、寺院とも極めて少ない。近所や地域の人からいわれるので参るというのは、神社、寺院とも、この新入生の調査に関するかぎり、零となっていることは、今日の日本社会の宗教に関する近代化の度合を示すものであろう。

〔宗教意識形成における諸契機〕

次に、新入学生の種々なる環境から、彼らのキリスト教意識形成のための特に顕著な要素となっているものを調べてみたところ、二つのことがわかった。

第一には、その形成過程において、第二には、キリスト信徒になるための決意において見られるもので、前者については、学校の教師が、後者については

教会の牧師或いは伝道師などが最も有力な影響を与えていることを示している。すなわち、R28 のキリスト教信仰に有力な影響を与えているものを、家族や学校や友人や教会の先生の奨励、ラジオ、テレビ、雑誌、書物等のマス・コミ、その他についてしらべたところ、いろいろな影響から自分自身でよく考えてというのが一番多く、31.6% を示し、彼らの主体性と、影響の総合性が考えられている。そして、その次に種々なる影響力の中では、学校の教師というのが 25.9% で筆頭である。これは新入生の中で、キリスト教宗教意識を形成するに最有力であったのがキリスト教主義の高校の教師、或いは入学後日は尚お浅いけれども、キリスト教主義の大学である現在の大学の教師の影響であるという意味になると思う。その次が親しい友 6.7%、教会の先生の奨励 5.8% となっており、この教会の先生の奨励が比較的低いのは、この数字が新入生の全体についての比率であり、まだ教会に行ったことのないものさえ沢山あるという事情によるのであろう。

次にキリスト教意識の形成を経て、受洗して信徒になった少数のものについて見れば、R17 に関してすでに一言したように、受洗の決意に影響を与えた人の中中最有力なのは教会の伝道者であり、51.1% を示し、母親 21.7%、高校教師と、友人がそれぞれ 13% となっている。また、求道者の場合を見ても、R17 に示されているように、受洗へ向って影響を与えているのは、牧師が 58.3%、母親が 16.6%、友人 12.6%、学校教師 12.3% で、信仰を得て、受洗にふみきるための契機に教会の伝道者を示されている。学校でキリスト教意識を形成し、教会に出席を奨励し、教会生活を送って、受洗への決意を得るというプロセスが示されている。

新入学生のキリスト教信仰形成の諸契機の中彼ら自身の主体的な動機は何であるかを問うたところ、人間形成のためにが最高で、自己の弱さ、罪の自覚、それからの救いを求めてというのが次にきていることは注目すべきことである。四大学の通計で、全体の中無回答者の全部がキリスト教信仰をもっていないものとは考えられず、その中には信仰はあっても具体的な回答のできないものもあったであろうが、とにかく、何らかの動機を示したものの 142 人の中の

比率を見ると、R29 の①の人間形成のためが 29.7%、⑤の自己の弱さ、罪の自覚が 25.3%、④ 何か永遠的なものをつかみたい気持ちからが 14% となっており、学校の雰囲気 17% 及び家の雰囲気 5.6% というものもあるが、大体は主体的に最も純粋に自己を見つめた結果、信仰に進みつつあるものであることを示している。

〔キリスト教への評価意識〕

最後に、新入生の主体的なキリスト教に対する評価の意識については、調査の R30 以下に見えている。それによると、あなたはキリスト教の精神を多くの人びとに十分与えるためにできるだけ貢献したいと思いますかという問いに対して、別になんとも思わないというのが四大学の通計で 60.8% で、貢献したいというのが 23.3% である。進んで他者にキリスト教精神をもって働きかけたいというのは相当進んだ段階に考えられることである。これは単に信仰を得ているという段階の現象ではない。これが積極的な答えの比較的少数であるゆえんであろう。又、この学生は入学早々の時でもあり、キリスト教的な使命の自覚とまではいたっていないものが多いのは自然であるといえよう。しかも、この段階において、すでに、23.3% の積極的な答えを見たことはむしろ比較的が多いとも考えられる。その貢献の分野は質問書に書かれた例をそのまま、教会、学校、保母、子供会のリーダーなど、又、女子青年会等であり、大体は身近にできる現実性のあるものであった。

R31の現在のキリスト教があなたと社会にとって何か意義があると思いますかというのに対しては、あると思うというのが 52.1% で殆んどあると思わないというのは 29.6% であった。しかし、有害だというのは回答者中1名であった。その人の理由とするとところは、「安楽椅子に深く腰をおろして、社会を見ようとしていない。自己満足に陥っている」というのであった。キリスト教の自己にとっての意義については、クリスチャン及び求道者の場合には人生を生きる上よりどころとなる、物を考える規準となる、罪を犯す弱さから守られる等の類型であり、社会にとっての意義としては、人間を精神的に救済する、愛の実践等であり、その他のキリスト教に関心をもつ F 3 の 8 において

は、自己のためには、心を鎮める、不幸に打克つ、運命に打克つ、人格向上、道徳的に正しく生きるため等、比較的道徳的な理由が多い。又、この人々の社会にとっての意義についての考えによれば、社会を平和にする、よい社会、愛の社会にする、社会事業に貢献等、これも社会平和又は社会福祉方面への期待をもって評価していることがわかる。

R32のあなたは現在のキリスト教に何を望みますか。最も必要と思われることについての回答を見ると、クリスチャンの場合、現実に即して伝道せよ、愛の社会的実践等が多く、次に教派の統一、或いはプロテスタントには信仰のきびしさが足りない等の要望がある。求道者の場合にも、広くあらゆる階級に伝道せよ、教派が分れているのはよくない、信者ぶらないこと等の要望あり、関心をもっているF3の8のグループでは、庶民的になれ、余りおしつけがましい、信者の態度として実生活に信仰を生かせ、飾りだけではいけない等というタイプのものである。この学生たちは新入生のグループであり、その多くのものは、最近キリスト教に身近かに触れたものであろうが、しかもその印象は鋭く、キリスト教に対する一般的な内外の評価と概して軌を一にするものであることが分った。

尚、キリスト教主義大学在学中における宗教意識の変化、及び歴史的変遷概要については次号に資料を掲げて論評する予定である。

註1 新教信徒数 403,846 (36年3月末)、旧教信徒数 323,599 (36年6月末)、計727,445 (37年度基督教年鑑、キリスト新聞社による)。全国人口は9342万 (1960.10.1、国勢調査—37年度朝日年鑑による)。

註2 C. B. DeForest, The History of Kobe College, Chicago, 1950, P. 157.

註3 前号36頁の表中R22の4)は父5母6となっている。その行の(受洗者の場合)という括弧内の箇所は一段下げる。R22受洗に対する両親の態度(若し受洗せんとする場合)の括弧内の数字(1), (1), (4), (5)は両親の反対で受洗でなかったものの数を示す。

註4 オルポート著 原谷達夫訳「個人と宗教」 岩波 1954. P. 45.

註5 同上、 P. 46.

Research on the Religious Consciousness of Students in Women's Christian College in Japan (II)

Résumé

Yasuo Mizoguchi

Taketoshi Sasabe

Monkichi Namba

1. In the last issue we reported the result of the research on religious consciousness of the freshmen of Miyagi Gakuin College, Tokyo Woman's Christian College, Hiroshima Jogakuin College and Kobe College. This contains an explanation of the result of the research. The survey made on sophomore, junior and senior students will be reported in the next issue.
2. The main points of the survey consist of (1) reasons for students' choosing their colleges, (2) high school teachers, role in advising students going on to the specific college, (3) family background, especially its attitude towards religion and its influence on the students' religious consciousness.
3. As a reason for choosing the college, "attainment of a higher culture" was the most popular answer. The number of those who entered college with a desire to receive Christian education was comparatively low. There were some students who chose their college without knowing it to be a Christian college.
4. Advice of high school teachers emphasize the students' academic aptitude to the college and the standpoint of Christian education is left out of their consideration.
5. The religious attitude of the family was mostly indifferent or took a let-alone policy. However, considerably a great number of parents had objection to their children's baptism.

6. Considering the family, college, church and friends as elements of influence on freshmen's religious consciousness, we found that their religious consciousness was formed through two processes and the influence by the above elements differed in each process. In the first stage, teachers were the most influential element and in the second stage, when students make their determination to be baptized, the minister of the church gave the strongest influence. Parents, though keeping in the background, also worked as a strong influence.
7. Influence of the community is not very evident. However generally speaking, it is common to all to accommodate themselves traditionally to the religious rituals held in their community.
8. Whether Christian or non-Christian, students' response to and evaluation of Christianity or Christian churches are very good and high. Christians see significance in Christianity from the religious angle and non-Christians from cultural or moral angle.
9. The students expect Christianity or Christian churches to make practical application of their religious teaching in society and to propagate it not only to some specific class but also to people of all classes, and become unified overriding denominational differences.